

ジョン・ダン『不意に発生する事態に関する瞑想』

試 訳 (I)

湯 浅 信 之

皇太子殿下

私は三度生まれました。初めは自然的誕生で、この世に産み落とされた時です。次は超自然的誕生で、私が神に使える聖職者となった時です。そして今、この病から救われ、九死に一生を得て、私は奇跡的誕生を経験いたしました。私の第二の誕生に当って、ご尊父であらせられる国王陛下は、聖職者としての私を支援することをお約束下さっただけでなく、私が聖職者となるように御指導下さいました。さて、この度生まれるに際して、私は一人の父親となりました。私の子供はこの本です。この本は、私から生まれ、私と共に此の世に参りました。故に、敢えて失礼を顧みず、(丁度、この本の父である私を父君に捧げたように)、私の子であるこの本を皇子であらせられる殿下に献上致します。私の屈辱の生き写しであるこの本を、父君の生き写しであらせられる殿下に捧げます。神が私の黙想をご存じであれば、それを公にしなくても良いとも考えられます。しかし、善き王侯の示す手本は神の掟となります。また、ヒゼキヤ王²⁾は病後に、病に関する黙想を記しました。更に、私は今日まで(単なる傍観者としてではなく、参加者として)父君の御世の幸福を見て参りましたが、若し殿下がこの本を快く御納め下さることにより、私の子に命を与えて、死後も私の思い出を永く留めるものとして下されば、私は生き延びて殿下の御世の幸福をも(私なりに)見る事が許されることになるのです。

殿下の

最も卑しい

最も献身的な僕

ジョン・ダン

I. 病気の最初の発作——最初の変化, 最初の病的兆候

黙 想 I

変化してやまぬ、故に、哀れな人間の状態よ。この瞬間に私は健康である、しかし、この瞬間に私は病気となる。その急激な変化、悪化に驚いて、私は原因が何であるかを知らず、病名も分からない。我々は健康に務める。食べ物、飲み物、空気、運動などに細心の注意を払う。建築に使われる石を一つ一つ磨くのであるから、我々の健康は永続的な、堂々たる建物となる。ところが、瞬間的に大砲がすべてを打ち、覆し、破壊する。どんなに努力しても、病気は防ぐことはできない。細心の注意を払っても予測できない。不快としてのみ考えるならば、全く謂れも無く、病気は瞬時に我々を召喚し、捕捉し、占有する。神の刻印をもたぬ人間の憐れむべき状態よ。神は自ら不滅であるから、不滅の石炭、火種を我々の中に置かれた。我々はそれを吹いて、炎に燃え上がらせることも出来たのに、最初の罪によって消してしまったのである。偽りの財宝に憧れて貧乏となり、偽りの知識に憧れて愚か者となってしまったのである。故に、我々は今では死ぬだけではない。拷問を受けて死ぬのである。病気という苦しみを受けて死ぬのである。それだけではない。病気になる前から、病気に対する予感、懸念、心配で苦しみ、苦渋を味わうのである。片手がもう一方の手に脈拍を尋ね、目は尿に「具合は如何」と聞くのである。幾重にも重なる不幸よ。我々は死ぬが、死を楽しむことができない。病気に苦しめられて死ぬからである。我々は病気に苦しめられるが、苦しみが来るまで待つこともできない。予感や予測が苦しみを先取りして、苦しみを死も来ないうちから、死を促す。我々の滅亡は、最初の変化と共に孕まれ、病気と共に生命を与えられ、死と共に生まれる。死は最初の変化と共に始まるのである。人間は小宇宙で

あると言われるが、その誉め言葉の意味は、人間が自己のなかに地震を持っていて急に震え出す、稲妻を持っていて急に目が眩む、雷を持っていて急に耳鳴りがするということなのか。また、日蝕があり急に目の前が暗くなり意識を失う、赤々と燃える彗星があり急に火のような発熱をし、血の河が流れていて急に出血するということなのか。人間が小宇宙であるのは、自己を破壊し処刑するだけでなく、その刑罰を予告する能力を持っているからなのか、或は、病気を予感し、病気を助け早め、不治のものとする能力を持っているからなのか。まるで石炭に水を注いで火力を煽るように、高熱を冷たい憂鬱で包まなければ、熱だけでは早く死ねないと考えているようだ。我々の自然な熱、不自然な熱に、自分でつくる憂鬱という人工的病気を加えなければ、仕事（それは自己破壊である）が完成しないかのようなのである。ああ、何という複雑な病、ああ何と不可解な病氣、ああ、何という憐むべき人間の状態よ。

論 議 I

若し私が単なる土塊か灰に過ぎなければ、私は神に語り掛けることができる。神の御手が土塊や灰を創造したからである。神の御手は轆轤であり、その上でこの土の器は作られた。神の御手はまた壺となり、この灰はその中に保存されるであろう。私は神の霊の神殿の土塊であり、灰である。いかなる大理石もその尊さには及ぶまい。しかし、私は単に土塊や灰ではない。私は私の最高の部分、すなわち、魂でもある。そうであれば、神の息吹である私は、この敬虔な「論議」を神に吹き返すことができるはずだ。私の神よ、私の神よ、何故私の魂は私の肉体のように敏感ではないのだろうか。私の肉体が病気を予感するように、私の魂は罪の懸念、心配、予兆、予感、危惧、憂慮を何故感じないのだろうか。何故私の魂は常に脈拍を保ち、罪の誘惑が近づけば激しく打たないのだろうか。何故私の目には常に涙が溢れ、私の精神的罪惡の証をしないのだろうか。私は罪の道に立って

る。(先天的に、必然的に、全ての人間は罪の道に立っている。あらゆる道に蛇が潜み、あらゆる職業に誘惑があるからである。) それなのに、避けるべき誘惑の道に、私は進み、走り、飛び込んで行く。いや、私は疫病の住む家に押入っている。誘惑の館に押し込み、悪魔を誘惑している。私には誘惑されたくないと思っている人達を唆し、促している。私は罪の故に病にかかり、罪の習慣の故に床に伏し、床を離れられず、葬られ、腐敗している。それなのに、その間じゅう一向に私の病気に対する予感も、動悸も、意識もない。ああ、何と高い、ああ、何と深い不幸なのであろうか。病気の最初の兆候は地獄である。地獄の闇と恐怖という光りによってのみ、私は情欲、嫉妬、野望の熱を見ることができる。最初の使いが「死ぬかもしれぬ」や「死ななくてはならぬ」ではなく、「死んでいる」との宣告を伝える。私の魂がその病状について最初に聞く知らせは「直らない」、「手の施しようがない」というものである。しかし、ああ、私の神よ、ヨブは此の世の苦しみにあって、神に向かって愚かなことは言わなかった。²⁾ 私も精神的苦しみにあって、愚かなことは言うまい。神よ、あなたは我々の魂の中に脈拍を置かれたが、我々はそれを測ろうとはしない。我々の良心の中に声を置かれたが、我々は耳を傾けようとはしない。我々はそれを取り出し、愚弄し、飲み干し、寝て忘れる。目を覚ました時、ヤコブのように、「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった」³⁾とは言わない。我々は知っていても知らぬ振りをして、知ろうとはしない。しかし、神は時計を作ってバネを付けずにおかれるだろうか。魂の様々な機能や肉体の様々な器官という歯車を作り、それらを動かすべき恩寵を与えずにおかれるだろうか。或いは、バネを作って、そのネジを巻かうれずにおかれるだろうか。初めの恩寵は与えても、それを更に多くの恩寵で補うことはされないのだろうか。そうであるならば、たとえ最初の恩寵は与えられていても、それをを用いることができない。そうであれば、それは丁度どんなに努力しても、自然の力では恩寵を得ることができないのと同じことになる。だが悲しいことに、われわれの置かれている境遇はそんなものではない。我々はみんな放蕩息子⁴⁾なのである、しかも、勘当されても

いないのである。我々は分け前はもらっているのに、悪用してしまったのである。決して与えられなかったわけではない。此の世に於て我々は神の小作人である。しかも、地主である神が小作料を我々に支払っている。毎年ではなく、年四回でもない、毎時間、一時間に四回も支払っているのである。毎分神は憐れみを更新されている。それなのに我々は「理解せず、悔い改めない」⁹⁾のだ。神に癒やされるのを拒んでいるのだ。

祈 禱 I

ああ、永遠の最も恵み深き神よ、あなたの本来の姿は円である。初めも終わりも変わる事なき完全な円である。しかし、あなたの働きを考えれば、あなたの姿は直線となる。初めから終わりまで一生を通じて真直にあなたは我々を導き、恵みによって私の最後に私が希望を寄せることを許し、また、初めから今日に到るまでに与えられた数々の憐れみを顧みることを許される。先ず此の世に私が生を受けた時、あなたの教会の中に私を植えられたあなたの恵み、また、あの世が始まる時に私を選び、命の本に私の名前を書き入れて下さるあなたの恵みを考えるならば、此の世に於る私の全ての行いの初めにあなたのみ恵みがあるという聖なる考えに達することができる。そうであれば、全ての初めのなかに、罪のもたらす精神的病気の接近、到来の中にも、「神の人よ、鍋には死の毒が入っています」¹⁰⁾というあの声を私は聞くことができ、私が餓えたように、貧り食うように、飛び込みつつあったものから遠ざかることができる。賢い神の僕であったソロモンは、「忠実な使いは癒す」¹¹⁾と言っている。私の病気の初め、罪の初めに聞えるあなたの声は、忠実な使いである。若し私とその光を手遅れにならないうちに見ることができれば、その声を素早く聞くことができれば、「そうすれば、私の光は曙のように射し出で、私の傷は速やかにいやされる」¹²⁾であろう。ああ、私の神よ、どうか愚かな迷いから私を救って下さい。すなわち、あらゆる罪とあらゆる罪の誘惑を恐れるような、弱さ、未

熟さ、実直さを持つことは、詮索し過ぎることであり、危険なことであると考えたり、このような疑いを持って熱心に務めることは、必要以上に精神を憂鬱にし、あなたの愛と摂理に対する不信を招くものであるなどと考たりする迷いから守って下さい。如何なる病の初め、如何なる罪の接近に於ても、あなたが私に語り掛けられることを堅く信じ、また、その声に耳を傾け、あなたのところに逃げて行けば、あなたは私を支えて下さる、たとえ生まれつきの病で倒れていても、あなたは私を抱き起こして下さいと確信させて下さい。ああ、主よ、この切なる祈りを、我々の生まれつきの病に罹られたが故にそれを知り尽くしておられ、我々の罪の償いをなされたが故にその重さを知っておられる、あなたの御子、我々の救い主、イエス・キリストのために、聞き届けて下さい。

II. 働きの犯される

五感の力と機能、及びその他の能力が変化し、衰える

黙 想 II

天体は絶えず動いているが、それだけ不変性を失うわけではない。天体は絶えず一定の動きをしているからである。地球は常に不動であるが、それだけ不変性を備えているわけではない。地球は絶えず変化し、そのあらゆる部分で溶解しているからである。人間は地球の最も高貴な部分であるが、土というよりは、雪人形のように、溶解している。人間は嫉妬によって溶解する。嫉妬する者は瘦せ衰える。しかし、熱は人間を雪のように溶かしはしない。溶鉱炉の中で溶ける鉛、鉄、真鍮のように溶解するのである。すなわち、ただ溶解するのではなく、同時に灰化するのである。人間を粒子に、灰に変えて、水ではなく石灰にしてしまうのである。しかも、どれだけ早くかと聞かれるなら、答えることができないほど早く、質問を

する間もないほど早くである。地球は私の肉体の根源であり、天国は私の魂の根源である。これら二つのものは、本来これら二つの場所にあるべきであるが、これら二つのものは、同じ早さで、これら二つの場所に帰って行くのではない。私の肉体は押しずとも落ちて行くが、私の魂は押しなくては登って行かない。私の魂の歩み、その早さはよじ登るようであるが、私の肉体は落下するのである。天使の故郷は天国であり、天使は翼を持っているが、それでも天使は梯子を一段ずつ登って天国に行った。⁸⁾ 一分間に何マイルも行く太陽よりも、もっと早く走る大空の恒星よりも、ずっと早く私の魂は大地に向かって落ちて行くのである。病が襲いかかったと思う間もなく、私はその勝利を知る。瞬く間に目が霞む。瞬間的に味覚が鈍り、失われる。瞬間的に食欲が損なわれて、消える。瞬間的に膝が弱り、力が抜ける。あつと言う間に、死の肖像、複写とも言うべき眠りが奪われ、その代わりに本物の死が現れ、命の代わりに死を持つことになる。アダムの罰は「顔に汗してパンを食べよ」⁹⁾であった。私の罰はその何倍も重い。私は神から与えられた仕事に精を出し、顔に汗してパンを得て、持っている。その上、いま私は顔から足の裏まで何度も何度も汗をかいている。それなのにパンが食べられない。食べ物がとれない。人間の憐れむべき配分よ。人間の半数は食料を欠き、半数は食欲を欠いでいる。

論 議 II

ダビデはサウル王の面前で、¹¹⁾メフィボシエトはダビデ王の面前で、¹²⁾自分を「死んだ犬」と呼んだ。それにもかかわらず、ダビデはサウル王と、メフィボシエトはダビデ王と、言葉を交わすことができたのである。どんな人間でも偉大な人間に対して、その偉大な人間が神に対するほどには小さくはない。神と人間を比較する尺度を我々は持っていない。無限なるものに対してはどんな割合も尺度にはならない。此の世に自分の墓しか持たぬ者、その墓も借り物でいずれ他のもっと偉い人に明け渡さねばならぬ者、

墓すらなくて汚物の山に葬られる者、自分自身、すなわち自分が運んでいる僅かばかりの土塊しか持たぬ者、その自分自身の土塊ですら自分のものではなく他人の奴隷に過ぎない者、その様な者ですら、神との比較においては、全てのダビデの家来、全ての世の王侯、全ての空想的巨人を練り合わせて合体したほど、或るいは、神が世界を与え賜うた人達の子孫の唯一の生き残りに劣らないほど、価値ある者である。従って、どんなに小さな私でも、「存在していないもの呼び出して存在させる神」¹³⁾であるから、存在しないに等しい私でさえも、神に語り掛け、私の神よ、私の神よ、何故あなたの怒りがこのように急激に私に襲い掛かるのですか、何故あなたは絶えず私を溶かし、ばら撒き、水のように大地に注がれるのですかと言うことができる。あなたはノアの洪水を起こしたとき百二十年待ち、¹⁴⁾荒野の反徒に対しても四十年待たれた。¹⁵⁾ それなのに私のためには一分も待っては下さらないのであろうか。あなたは出頭命令も裁定宣告も、召喚命令も判決朗読もごっちゃにされてしまわれるのであろうか。あなたは召集も、戦闘も、勝利も、凱旋も一つにされてしまわれるのであろうか。私をあなたの敵と確認するや否や捕らえ、捕虜として死に渡し、鞘から刀を抜くや否や、私を切り倒し、どれ程のあいだ病気であったかと聞かれても、最初の一分から死の手に押さえられていたと言うしかないようにされるのであろうか。私の神よ、私の神よ、昔あなたは、つむじ風¹⁶⁾ではなく、やさしいそよ風に乗って来られたものだ。あなたの最初の息吹は私に魂を吹き込んだ。¹⁷⁾ あなたはそれをいま吹き消されるのだろうか。会衆のなかのあなたの息吹、教会のなかのあなたの言葉は、此の世における聖なる交わりと慰めを、また、あの世における救いの完成を囁いている。それなのに、この部屋のなかでは、あなたの息吹は、溶解と、破滅と、分離と、離別の嵐を吹き荒ばれるのであろうか。明らかに、そんなことをされるのはあなたではない。それはあなたの手ではない。殺戮の刀、破壊の炎、砂漠の嵐、肉体の病気、ヨブの全ての苦悩——それらは残らず悪魔の手によるもので、あなたが送られたものではない。私の神よ、乳母の手を離れてから今日まで、あなたは私を自分の手で導いて来られた。自分以外の誰の手にも私の

矯正は任せられないとあなたが考えて来られたことを私は知っている。私の両親も私の矯正を召し使いに任せはしないであろう。同様に、あなたも私の矯正を悪魔に任せられる筈がない。私はダビデと共に神の御手のなかに生まれ落ちたのである。¹⁸⁾ ダビデと共に私は神の恵みの大きさを知っている。その恵みによって、私はこの状況のなかにあっても、私の身体を溶解する病気の速さ、激しさよりは、復活の時に神が私の灰を集め、再び結合して下さる速さ、激しさを思うのである。私はそのとき「死人よ立て、死者よ起きよ」¹⁹⁾という天使の声を聞くであらう。私は死んでいてもその声を聞くことができる。その声が響きわたるや否や、その効果は表れて、此の世で誰が死ぬよりも早く、全ての人が立ち上がるであらう。

祈 禱 II

ああ、最も恵み深い神よ、あなたは自分の目的を追求され、完成される。あなたは私に病気の予感を与え、私が死ななくてはならぬことを教えられた。いまあなたは私の病気を重くして、私の死が迫っていることを教えられる。あなたは手始めに私の目を覚まされたが、さらに私を倒すことによって、私を呼び起こし、私を裸にすることによって、あなたの服を着せ、此の世の快樂と食事に対する私の肉体的感覚を鈍らせることによって、私の精神的感覚を研ぎ澄まし、あなたを恐れるようにして下さった。あなたがどのような手順と手続きを経て私の身体を溶解しようとされているにもせよ、主よ、どうかその手順を早め、手続きを倍速して、私の魂を高め、一步でもあなたに近付いて、遂にはあなたに到達することができるようにして下さい。私の味覚は消えたのではなく、「主の恵み深さを味わい」²⁰⁾知るために、ダビデの食卓のところに行ったのである。私の食欲は失せたのではなく、在天の聖者と共に「小羊の婚宴」²¹⁾にあずかろうとして、此の世に於る神聖な食卓、聖徒の聖餐にあずかるようになったのである。私の膝は弱くなったけれども、それは容易に跪いて、じっと長くあなたに祈る

ことができるようになったのである。「穏やかな心は肉体を生かす」²²⁾と書かれている。穏やかな心とは、あなたの訪問を受けた心、あなたの訪問によりあなたに向けられた心のことである。「わたしの肉にはまともなところもありません、あなたが激しく憤られたからです」²³⁾とあるが、あなたの働きをよく考え、この病はあなたの怒りではなく、あなたの矯正であると考えれば、私の肉にはまともなところがあることになる。「骨にも安らぎがありません、私が過ちを犯したからです」²⁴⁾とあるが、あなたを悲しませた私の罪を、あなたを喜ばせたイエス・キリストに委ねれば、私の骨には安らぎがあることになる。ああ、私の神よ、あなたは「柴の間に燃え上がっている炎」²⁵⁾となられたことがある。この苦しい病の茨と刺のなかで炎となって姿を現して下さい。この茨と刺の道のなかでも、あなたは私を顧みる私の神であることを、私が見て知ることができるように。ああ、主よ、この切なる願いを、あなたが此の世において「茨の冠」²⁶⁾を戴くことを許されたにもかかわらず天の王である方のために、聞き届けて下さい。

III. 遂に床に伏す

患者は床につく

黙 想 III

他の動物との比較に於て、人間の身体にたった一つの特権、長所を我々は認める。それは、他の動物のように四つ這にならず、真直ぐに立っているが故に、生まれつき天を見るに相応しい姿勢をしていることである。これは真に有り難い姿勢であり、そのような姿勢を与えてくれる魂を、それだけ天に近づくことにより魂に報いている。他の動物たちは大地の方を向いている。大地だって人間が見るべきもの、考えるべきものには違いな

い。人間はいずれそこに行かなくてはならないからである。しかし、他の動物のように、人間は大地にいつまでも留まることはない。それ故に、人間の生まれつきの姿勢は、本当の故郷である天を見詰めるようにできているのである。それが人間の特権である。しかし、何とこの貫禄には威厳が伴わないことか。熱病が彼を倒し、王座から引きずり降ろすことができる。昨日まで金の冠を戴いて、5フィートほど栄光の冠に近付いていた頭を、今日、熱病が足元まで引きずり降ろすことができる。神が人間に命の息吹を吹き込まれたとき、人間は大地に寝ていた。神が命の息吹を再び人間から取り出すとき、神は人間を床に寝せて、準備をさせる。どんなに狭い牢獄でも囚人が二三歩あるく広さはある。木の洞穴や、虚ろな壁に閉じ籠った隠者たちも、あの桶に樽詰めになった変人も、²⁷⁾一人残らず立ったり、座ったり、ある程度姿勢を変えることができた。それに比べて、病床は墓である。病床で患者が語る言葉は墓碑の変形したものである。毎晩寝る床は墓の雛形である。夜になって寝るとき、我々は翌朝何時に起きるか、召し使いに告げて置く。しかし、病床にあっては、一体何日すれば、何週間すれば、何ヶ月すれば起きれるのか、自分にも皆目分らない。人々の頭に立った者も、その足で踏みつけた者共と同じ高さに寝ることになる。人々に恩赦を与えた手も、自分の許しを乞うことすらできない。たとえ、手を上げれば許すと言われてもである。足には何と奇妙な足枷、手には何と奇妙な手枷がかけてあることか。紐が緩めば緩むほど、手足はきつく縛られ、筋肉や靭帯が弛緩すればするほど、手足は役に立たなくなる。墓に入れば、私は友人の声となり、私の思い出を語る彼等の言葉となって、石の向こうから語りかけることができる。病床にあっては、私はただ私の亡霊でしかない。見る人を恐れさせて、語りかけることもできない。彼等は私を最悪の状態と考えるが、もっと悪いことが起こると恐れている。私は死んでしまったと思いつつ、夜中に目を覚ましては安否を気遣い、朝起きては安否を尋ねる。哀れな、(万人に共通ではあるが)非人間的な姿勢よ。病床にじっと寝て、私は墓で寝る練習をしなければならない。それなのに、起き上がることにより、復活の練習をすることは許されないのだ

る。

論 議 III

私の神よ、私のイエスよ、私の主よ、私のキリストよ、私の救いよ、私はあなたの声を聞いている。子供をあなたのところに連れて来た者たちをあなたの使徒たちが叱ったときに、あなたが使徒たちを叱った声を聞いている。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない」²⁸⁾とあなたは言われた。いま私はまさに子供となった。あなたの僕エレミヤのように、「わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから」²⁹⁾と私は言うことはできない。ああ、主よ、私は若者ではなく、乳飲児で、食べることもできない。這い這いがやっとで、歩くこともできない。私はどうすればあなたのところに行けるだろうか。どこであなたのところに行けるのだろうか。この寝床だろうか。私は弱い子供のようにつむじ曲がりである。座っているのも難しいのに、寝るのは嫌なのである。寝ればあなたに会えるのだろうか。今までそんなことがあったか。寝床はあなたの舞台ではない。あなたの風土ではない。主よ、あなたが私を寝床に横たえたとき、あなたはそれまでの罪の故に、私を責め、罰したのではないのか。自分が罪を犯した寝床に私を横たえるのは、自分の家の前で誰かを処刑するのと同じではないのか。あなたが予言者の口を通して「象牙の寝台」³⁰⁾に寝ている我々を叱られたとき、あなたの怒りは消えたであろうか。あなたが象牙の寝台を漆黒の寝台に変えるまでは、あなたの怒りは消えない。ダビデは「神のいますところを定めるまでは、決して寝床に上らず」³¹⁾とあなたに誓いを立てたが、寝台にあがることは力を示し、快楽を約束する。しかし、イゼベルという女について、「見よ、わたしはこの女を床に伏させよう」³²⁾とあなたが言われたとき、あなたは自ら注射をつけて、寝床を苦しみ、ひどい苦しみと呼ばれた。あなたが病床に釘づけにされた者は、どうやってあなたのところに来たらよいのであろうか。

あなたは会衆のなかに居られるが、私は孤独のなかに居る。百人隊長³³⁾の僕が家で病床にあったとき、病人はキリストのところに来れなかったので、主人が出かけて行った。中風にかかった人³⁴⁾が寝ていたとき、その四人の優しい友人は、彼を担いでキリストのところに来た。彼が来れなかったからである。ペテロの姑³⁵⁾が熱病で床についていたとき、キリストは彼女のところに來られた。彼女が行かれなかったからである。私の友人たちは会衆のなかで祈ることによって、私をあなたのところに連れて行くことができる。あなたには、聖霊となって、聖餐の秘跡となって、私を訪ねて頂かねばならぬ。この病床に投げ入れられたとき、私の弛緩した筋肉は鉄の枷となり、これらの張り巡らされた薄い白布は鉄の扉となって、私を閉じ込めた。主よ、「あなたのいます家、あなたの栄光の宿るところ」³⁶⁾を私は愛して来た。今ここに寝ていても、「いかに幸いなことでしょう、あなたの家に住むことができるなら」³⁷⁾と言う。しかし私は、「あなたの家に入る」³⁸⁾とは言えない。「聖なる宮に向かってひれ伏し、あなたを畏れ敬う」³⁹⁾ことはできるが、あなたの聖なる宮に来ることはできない。主よ、熱病に劣らず、「あなたの寝殿に対する情熱が、わたしを食い尽くしている」⁴⁰⁾のである。行きたくないのではないから、国教拒否をきめているのではなく、行くことができないのであるから、破門されたのである。主よ、あなたは「万軍の主」⁴¹⁾であり、行動を愛される。何故あなたは私の天職を奪われたのか。「死はあなたを賛美することはない」⁴²⁾とあるが、墓の入口であるこの病床にあっては、私があなたを賛美するのを誰も聞くことはできない。あなたが私の唇を開かれたのは、私の口があなたの賛美をあなたに見せるためではなく、あなたの賛美を人々に示すためであった。しかし、「他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまう」⁴³⁾という、使徒を襲った恐怖が私を捕らえた。だから、失格者として投げ捨てられないように、病人として倒れ伏すことになったのである。その気になれば、ハバクク⁴⁴⁾のように、あなたは私の頭を掴んで連れ去ることもできた。エリヤ⁴⁵⁾のように、戦車に乗せて私を連れ去ることもできた。しかし、あなたはもっと独特の方法で私を連れ去ろうとしておられる。す

なわち、あなたの御子と同じ方法を用いて私を連れ去ろうとしておられる。あなたの御子は、まず大地に「うつ伏せになって」⁴⁶⁾祈り、それから「地上から上げられ」⁴⁷⁾て、自ら言われたように十字架につかれた。そして、まず陰府に下り、それから、天に昇られたではないか。この寢床よりもっと低い立場が（立場といっても立つところではなく、伏すところだが）ある。明日になれば、私はこの寢床よりももっと低い床、大地の表面に置かれ、次の日には、もう一段低いところ、墓、すなわち、大地の腹のなかに置かれるであろう。今のところ神は私を天と地の間に隕石のようにぶら下げている。私は天に行くことができない。土でできた肉体が重いからである。私は地に入ることもできない。天から来た魂が私を支えているからである。ああ、神よ、「人々が争って、一人が他の一人を打った場合は、彼が死なないで、床に伏しても、彼を打った者は、補償し、完全に治療させねばならない」⁴⁸⁾というのはあなたの掟ではないか。あなたの手が私を寢床に撃ち倒したのであるから、たとえ私が死ななくても、あなたは私に補償しなくてはならない。先ず、私が生きている間は、この病の記憶が私の益になるようにして頂きたい。次に、若し私の身体がさらに低いところに落ちるようであれば、私の魂をこの微温湯から取り出して、何度も何度もあなたの涙、あなたの汗、あなたの血で洗い清め、あなたの父に捧げて頂きたい。

祈 禱 III

ああ、最も力強く最も恵み深い神よ、あなたは私の足をすくわれたが、私の土台を取り去られたのではない。私の土台はあなた自身である。あなたは私から直立した姿勢を奪われ、私は立ってあなたの王座である天を仰ぎ見ることができなくなったが、私が寝たままあなたを見るに必要な光は残して下さった。あなたは私の身体の手を弱くして、私はあなたに跪くことができなくなったが、いつもあなたに跪いている心の膝は残して下さっ

た。この寢床をあなたの祭壇とされたように、私をあなたに捧げる生贄として下さい。御子、イエス・キリストをあなたの説教者とされたように、私がキリストの執事として仕え、その御手によって私の身体も魂も喜んで捧げることができるようにして下さい。私はあなたのところに行く。ああ、神よ、私の神よ、私はあなたのところに行く。(私のところに来られるあなたを抱き締めて、あなたのところに行くのだ)。あなたの僕ダビデに約束されたとおりに、「病む時、私の寢床を全てあなたが作られる」⁴⁹⁾と信じて、私はあなたのところに行く。私の寢床を全てあなたが作られるのであれば、私がどちらを向いても、私はあなたの方を向いたことになる。そして、私の身体の全ての上にあなたの御手を感じるように、私の寢床の全ての上にあなたの御手を見出して、私の全ての矯正も、全ての回復も、残らずあなたの御手から流れ出ることを知るであろう。あなたは病の苦痛のなかで、この羽布団を茨に変えられたが、今度はこの茨を羽に、あなたの鳩の羽に変えて、良心の安らぎ、あなたの真の慰め的手段であるあなたの箱船への聖なる信頼、あなたの定められた掟、あなたの教会の秘儀などを私に与えて下さい。私の寢床を忘れて下さい。それは怠惰の床、いや、それよりもっと悪いものになってしまった。ああ、神よ、決してあなたの有利な立場を利用して、おまえが何度も私を見捨てたところ、そこでおまえを見たなどと言って、私の魂を震え上がらせないで下さい。私の汚れた寢床をこの激しい熱で焼き、この溢れる汗で洗い流した後は、ああ、神よ、もう一度私の寢床をつくり、あなたの命令に従い「横たわるときも自らの心と語り、そして沈黙に入る」⁵⁰⁾ことを許して下さい。私がこの寢床にいる間に、私のこれまでの全ての罪を寝かすことができる寢床をつくり、私が墓に入る前に、私の罪を葬ることができる墓をつくって下さい。そして、私の全ての罪を御子の傷口に預けた後は、私の良心はもはや不安を知らず、私の魂はもはや危険に晒されず、死後も私の名声は誹謗を受けることがないことを確信させて下さい。ああ、主よ、憐れみだけでなく、正義感をもって、あなたが私の願いを聞き入れられるように、多くのことを行い、多くの苦しみを受けられた方、あなたの御子、我々の救い主、イエス・キリストの

ために、どうか私の願いを聞き入れて下さい。

IV. 医者を呼ぶ

医者を迎えにやる

黙 想 IV

人間を小宇宙と呼ぶのは、小さ過ぎる呼び方である。神を除いて、人間は何物より大きい。人間は世界よりも多くの断片、部分からできている。世界よりも多くのものを持ち、大きいのである。もし、人間のなかで、世界に於けるが如く、これらのものが拡大・拡散すれば、人間は巨人となり、世界は小人となる。世界は地図となり、人間が世界となる。もし我々の血管が川となり、筋が脈となり、幾重にも盛り上がった肉が山となり、骨が石切場の石となり、その他の部分が此の世でそれぞれ対応するもの大ききになれば、大気ですらこの人間という天体を入れるには小さ過ぎるであろう。大空ですらこの星をやっと入れる大ききであろう。此の世にあるものは、全て人間のなかにそれに対応するものがあるが、人間のなかには世界が対応するものを持っていないものが多くある。人間という大世界に對するこの黙想を拡大して、人間が生み出すもの偉大さを考えてみよう。我々の生み出すものは我々の思想である。それは生まれながらに巨人である。我々の思想は、東から西へ、地から天へ走り、海陸を越えるだけではなく、太陽や大空のかなたに飛ぶ。私の思想は全てに到達し、全てを包含する。なんと不可解な謎であろうか、私の生む思想は全て太陽と共に、太陽を越えて、どこにでも行くことができる。一足で、一飛びで、太陽に追いつき、太陽を追い越し、どこにでも行くことができる。それなのに、生みの親の私は寢床という狭い牢獄に入れられている。此の世は、蛇や大蛇のような有害かつ有毒な生物、青虫や毛虫のように自分を生み出した世界

を食い荒らす生物、その他、さまざまな親から生まれ、さまざまな種類を混ぜ合わせた怪物を育てるが、それと同様に、人間という世界も、さまざまな病気や疾患を生み出すものである。あるものは悪性であったり、伝染性である。あるものは肥大性であったり、衰弱性である。なかには、幾つかの病気を混ぜ合わせたような複雑怪奇なものもある。此の世には、我々の様々な病気ほど、多くの、有害で、衰弱性の、奇妙な怪物はいない。ああ、なんと哀れな贅沢か。なんと惨めな豊かさか。我々の病気には名前のないものすらあるから、治療法のないものは多い。しかし、これらの巨人、これらの怪物に対して、我々は一人のヘラクレスを持っている。それは医者である。医者は全世界の力を集めて、もう一つの世界を直す。すなわち、全ての自然を用いて人を助ける。我々は医者を持っている。しかし、我々は医者ではない。動物たちは自分で自分の医者になれるから、この点で、我々は動物の偉大さに劣り、権威で及ばないことになる。雄鹿は追われて傷つくと、食べれば矢が抜けるような薬草を知っているとされる。これは不思議な嘔吐である。雄鹿を追う犬も病気に罹るが、それを直す草を知っていることは広く知られている。他の動物のように、人間も身近なところに薬をもち、簡単に入手できる目の前の平凡な一種類の薬草で、病気を直すことができるのかも知れないが、薬剤師も、医者も、他の動物の場合のように、身近なところにはいないのである。人間は他の動物のような生来の本能をもっていないから、目の危険に自然の薬を用いることができない。他の動物のように、人間は自分で自分の薬屋、医者にはなれない。我々は我々の黙想を呼び戻して、地上に引きずり降ろさねばならぬ。人間が縮小し、一握りの土塊になるとき、人間の大きさ、偉大さはどうになってしまうのか。人間が墓場の無知と、無意識にかえるとき、人間の天駆ける思想、全てを包含する思考はどうになってしまうのか。人間は自分で病気になるが、自分の医者になることはできぬ。病気は体内にあるが、医者は外から呼ばねばならぬ。

論 議 IV

私はヨブの正義は持っていないが、彼と同じ欲望は持っている。すなわち、「わたしが話しかけたいのは全能者なのだ。わたしは神に向かって申し立てたい」⁵¹⁾のである。私の神よ、私の神よ、あなたはどれほど早く医者にかかるように私に望んでおられるのですか。また、どの程度医者の言うことを聞くように私に望んでおられるのですか。物質も、人間も、医術もあなたがつくられたことを、私は知っている。だから医者にかかってもあなたに背を向けることにはならない。人間が裸を恥じるようになるまで、あなたは着物をつくられなかった。しかし、病の兆候が現れる前から薬はつくられた。此の世の初めからあなたは多くの薬草に病を直す力を与えられたからである。その時、すなわち、あなたが薬草をつくられたとき、あなたは我々が病気になることを意図されたのであろうか。そうではあるまい。あなたが我々をつくられた時に、我々が罪を犯すことを意図されなかったのと同じことである。あなたは我々が病気になることも、罪を犯すことも予測されたが、そうなるように意図されたのではない。主よ、あなたは、この地上に「その果実は食用となり、葉は薬用となる」⁵²⁾樹木を約束された。「良くなりたいか」⁵³⁾と言われたのは御子である。その声は、病気に罹っていて自分では治すことができないという告白を、病人から引き出す。「そこには医者がないのか」⁵⁴⁾と言われたのはあなたである。その声は、我々にあなたの配慮を受け入れさせる。「主は大地から薬を造られた。分別ある人は薬を軽んじたりはしない」⁵⁵⁾と、かの賢者は物質である薬について言っている。彼はまた医術、及び、医者について、「医者は長患を絶ち切る」⁵⁶⁾と言っている。これらの全ての声によって、あなたは我々に授けた様々の助けのほうに我々を送って下さる。その上、あなたは次のような声も認めておられる。「創造者に対して罪を犯す者は、病気になって医者にかかるがよい」⁵⁷⁾という声である。あなたはこの言葉の意味

を理解する力を私には与えて下さらないのだろうか。あなたは我々に医者
を祝福として送って下さるはずだ。そうであれば、あなたが送って下さ
った時、その医者のところに行くのは我々にとって呪いとはなるまい。呪い
となるものがあるとすれば、それは医者にかかる人が医者の中に落ち、
全面的に、完全に、医者の子となり、彼を盲信し、彼に依存し、彼の言う
ままになり、そして、あなたがあなたの教会に与えられた霊的な医薬を無
視することである。この意味で医者にかかることは罪悪であり、また、こ
れまでの罪の罰をうけることでもある。これが「その病の中にあっても、
主を求めず、医者に頼った」⁵⁸⁾アサの罪である。だから、主よ、私にあな
たの治療法を明らかにして、私がそれに忠実に従って来たかどうか確かめ
て頂きたい。もし私が従って来たとすれば、それはあなたが栄光を受けら
れるためであり、もし私が従って来なかったとすれば、どうか私を許し、
私が従うことができるように、私を助けて頂きたい。あなたの治療法は、
「病気になるなら放置せず」⁵⁹⁾である。あなたは私の勤勉がどのように表さ
れるように期待しておられるのだろうか。「主に祈れ。そうすれば、主は
治して下さる」⁶⁰⁾と書かれている。そのとおりに私は祈ります。私はダ
ビデと共に、「主よ、憐れんでください、私は弱り果てています。主よ、
癒してください、私の骨は恐れています」⁶¹⁾と祈ります。私の弱さはあな
たの憐みを誘導する理由・動機であり、また、私の病気はあなたが私に健
康を送る契機であることを私は知っている。不幸に苦しむときに不幸に同
情することほどあなたに相応しいことはなく、あなたは進んでそうされる
であろう。しかし、病気になった途端に、健康を求めて祈ることは相応し
いことであろうか。あなたの治療法によれば、さらに、「過ちを犯すな。
手を汚すな。あらゆる罪から心を清めよ」⁶²⁾である。主よ、私はそのとお
りに行ったであろうか。主よ、私はそうして来た積もりだ。あなたの恵み
により、私は私の昔の罪を憎むようになった。まだなすべきことが残っ
ているであろうか。あなたの治療法によれば、まだ残っている。「良い香り
の献げ物と、質の良い小麦粉を供え物として献げよ」⁶³⁾と書いてある。主
よ、あなたの恵みによって、私はそれも行った。私はあなたが私に貸し与

えられた僅かなものの僅かな一部を、あなたが貸し与えたいと思う人達に捧げた。だから、あなたの治療法に従って、あなたの定めた段階を経て、私は今や「その上で、医者にも助けを求めよ。主が医者を造られたのだから。彼を去らせるな。お前には彼が必要なのだ」⁶⁴と言えるところにまで到達した。私は医者を呼びにやる。しかし、彼が私の部屋に入るとき、「イエス・キリストがいやして下さる」⁶⁵というペテロの言葉を心に抱いて、彼が入るのを聞くであろう。私は彼の到来を待っている。しかし、「主の力が働いて」⁶⁶私をいやして下さることを忘れないであろう。

祈 禱 IV

ああ、最も力強く最も憐み深い神よ、あなたは真に健康と活力の神であり、あなたなしには、如何なる健康も罪の燃料となり、如何なる活力も罪を煽る吹子となってしまふ。ご覧下さい。いま私は激しい二つの病に苦しんでいます。そして、二人の医者が必要としています。肉体的医者として、精神的医者として、いずれもあなたが承認されたものです。私はあなたの秘儀にあずかる覚悟で、これらの医者に会うのです。そして、いずれの場合にも、あなたが人の奉仕によって、人を救うことを目論まれたことを賛美します。新しいエルサレム、すなわち、天国においても、あなたは一つの木があることを示された。それは「命の木」であって「その木の葉は諸国の民の病を治す」⁶⁷のものである。命はあなたと共にある。何故なら、あなたは命だからである。此の世であなたの僕により与えられるあらゆる種類の健康は全てあなたから下る。あなたは「バビロンをいやそうとした。しかし、いやされはしなかった」⁶⁸のである。主よ、バビロンの邪惡と、強情と、頑迷を、私から取り去って下さい。私の魂に宿ったあなたの霊が「主よ、いやして下さい」と言っているのを聞いて下さい。私は本当にいやされたいのです。「エフライムが自分の病を見、ユダが自分のただれを見たとき、エフライムはアッシリアに行き、ユダは大王に使者を送った。しかし、彼

はお前たちをいやしえず、ただれを取り去ることもできない」⁶⁹⁾と書かれている。主よ、間違った方法で魂や肉体をいやそうとする人達のところに私を行かせないで下さい。あなたが教会に与えた方法以外で魂はいやされず、あなたが自然に与えた方法以外で肉体はいやされません。迷信では魂の健康は得られず、魔術では肉体の健康は得られない。主よ、あなたが、あなただけが、両方を与えることができる。あなたは、そのままの姿で、両方の主であり、独り子の姿をとって、医者となり、両方を与えられる。「彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」⁷⁰⁾と予言者は言っている。そのとき、彼はまだ十字架の苦しみを受けてはいなかった。それなのに、我々は彼の受けた傷によっていやされたのである。いま、彼はすでに十字架の苦しみを確実に受け、それを薬として、確実に、効果的に、私に与えて下さっているのであるから、私はもっと確実にいやされるはずである。あの香油の滴りを受けて、治らない病があるのだろうか。あの血が満たすことのできないほど洞ろな血管があるのだろうか。あなたは「大地をいやす」⁷¹⁾と約束されたが、それは大地の民があなたにいやして下さるよう祈ればのことである。あなたは「水はきれいになる」と約束されたが、「沢と沼はきれいにしない」⁷²⁾と言われた。もし、私がこれまでの罪を再び繰り返す力を回復すれば、あなたはそれを許されないであろう。ああ、私の神よ、悔い改めの涙で大地をいやして下さい。そして、あなたに対する不動の確信を私に与えて、これらの水、これらの涙から、全ての苦味、全ての不信、全ての失望を取り除いて下さい。あなたの独り子は「ありとあらゆる病気をいやされた」⁷³⁾のであり、(どんな病気もいやされないものではなく、彼は通りがかりに、いともたやすくいやされたのである)。「イエスから力が出て、すべての人の病気をいやした」⁷⁴⁾のであり、(誰一人もいやされなかった者はいなかった)。(自ら言われたように)、彼は「全身を」⁷⁵⁾いやされたのであり、病の痕跡を残されなかった。その万能の医者が私を訪ねず、いやさず、完治せずに、この病室のそばを通り過ぎることがあるだろうか。あなたの使いを通じてあなたがヒゼキヤに言われたように、「見よ、わたしはあなたをいやし、三日目にあなたは主の神殿に上れ

るだろう」⁷⁶⁾と言われるのを、私は期待しているわけではない。モーゼがミリアムがいやされることを望んだとき、彼女のために彼に言われたように、「父親が彼女の顔に唾したとしても、彼女は七日の間恥じて身を慎むではないか。彼女を七日の間宿営の外に隔離しなさい。その後、彼女は宿営に戻ることができる」⁷⁷⁾と言われるのを期待しているわけでもない。しかし、たとえあなたが七日に（七は無限であるが）私の罪の数を（それは更に無限であるが）掛けようとしておられにもせよ、或るいは、今日私を連れ去って、「日が尽きるまで」帰さないとしておられるにもせよ、あなたの教会の証を私に与えて、私の精神的健康を確保して下さい。私の肉体的健康については、この病の治癒を助ける人達の手を通してあなたの栄光が最もよく現れ、また、あなたの僕たちの働きを見守る者が最もよく精神的利益を受けられるような方法・仕方で、あなたの計画を成功させて下さい。

V. 一人到来

医者が到着する

黙 想 V

病気は最大の不幸であるが、その病気の最大の不幸は孤独である。病気が伝染する恐れがあり、病人を看病すべき人達も来ないときは、医者も減多にやって来ない。孤独は地獄にも無い苦しみである。最初の行動者である神も、最初の受動者である自然も、単なる空白は認めない。何物も完全に空虚ではあり得ないのである。また、神も、自然も、孤独ほど空白に近いものは好まれない。私が死んで病毒を撒き散らすのであれば、その対策はある。私を焼けばよい。しかし、私が病人のまま病毒を撒き散らすのであれば、対策はただ一つ、私を訪ねず、孤独に陥れる他にない。このよ

うな状態は、私を訪ねたような顔をしているが、本当は訪ねたくないお偉方には口実となる。しかし、本当に私を訪ねたいと思っている者にとっては禁止となる。何故なら、もしも私を訪ねれば、他の人に病気を移す道具・媒介となるからである。また、そのような状態は、患者自身にとっては追放であり、破門である。彼は市民としての勤めからも、愛の施しからも遠ざけられる。長患いをすれば、そのうちに友人も訪ねて来なくなるであろう。しかし、悪性の疫病にかかれば、初めから友達は訪ねて来ない。神も交友の印を自ら認められているはずである。神は一人であるが、複数のペルソナを持っておられるからである。また、神の外に向かう行為は全て、神が友との交わりを愛しておられることを明らかにしている。天には天使の群れ、殉教者の集団があり、「私の父の家には、住む所がたくさんある」⁷⁸⁾のである。地上には、家族があり、都市があり、教会があり、学寮がある。いずれも複数の人から成り立つものである。そしてそれだけでは充分でないかのように、天と地にまたがる交わりもある。聖者の交わりが、地上の戦う教会と天上の勝利の教会を一つの教区にしている。だから、キリストが地上に降りたときも、彼の教区を離れたのではなく、肉に宿ったときも、彼の宮を出たのではなかった。神は万物をつくられたとき、それをご覧になって、良しとされたが、「人が独りでいるのは良くない」と言われたときほど、自分の作品の中に欠点を認められそうになったことはない。だから、神は「彼に合う助ける者」⁷⁹⁾を造られた。その者は彼を助けて、人の数を増やし、彼女の交わりと、さらに多くの交わりを彼に与えた。天使は生殖せず、増殖しないから、初めから多数造られたのである。星も同様である。しかし、地上のものは全て、「増えよ」⁸⁰⁾という祝福を受けている。此の世には、フェニックスのような単独なもの、孤独なものは存在しないと思って差し支えないと私は思う。地上に釘付けにされている人間は、此の世に単独なるものは存在しないと思っているから、此の世そのものも単独ではあり得ない、きっと惑星や恒星も此の世と同じような世界にちがいないと思っている。彼等は此の世のあらゆる種に複数を認めるだけでなく、世界そのものが複数であると考えている。そうであるならば、

孤独を嫌う者もひとりではない。神も、自然も、理性も、一致して孤独には反対するからである。ところが、人は誓いをたてて、疫病の真似をすることができる。病気と宗教を取り違えることができるのである。すなわち、隠遁して人を断ち、誰の役にもたたず、誰とも口をきかないことができる。神は二つの聖書、二つの遺書を残された。しかし、そのどこを探しても、聖者の交わりに達する道は、あらゆる良い行いを拒絶するような孤独を通るべきであるとは書いてない。それは追加であり、神の書いたものではない。補足であり、神の手になるものではない。それは聖書の本体にあるものではなく、後から行間に書き込まれたものである。一人取り残されて、孤独を強いられることは、心の病である。それは身体がかかる疫病に劣らないひどい病である。なぜなら、この病は病床を墓に負けない、いや、墓よりもひどいものにするからである。病床においても、墓においても、孤独であることには変わらない。しかし、病床にいる私は、孤独を知り感じるが、墓ではそうではない。また、病床にいる限り、私の魂は汚された肉体のなかにいるが、墓ではそうではないのである。

議 論 V

ああ、神よ、私の神よ、マルタにむかって「あなたの兄弟は復活する」⁸¹⁾とあなたの御子は言われたが、そのとき、彼女は彼が死んだのを悲しんで、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」⁸²⁾と議論を吹き掛けたが、御子はマルタを叱られなかった。ああ、私の神よ、そのように私を叱らないで下さい。なるほど、あなたに従う民の祝福と権威のために、あなたは「これは独り離れて住む民、自分を諸国の民のうちに数えない」⁸³⁾と言われ、(なぜなら彼等は諸国の民の上に立つべきであるから)、また、(彼等らは敵の襲来を受けずに)「独り安らかに住む」⁸⁴⁾とも言われているが、あなたが「ひとりよりもふたりが良い」⁸⁵⁾と言われ、また、「倒れても起こしてくれる友のない人は不幸」⁸⁶⁾と言われたことを、敢えて

私はあなたに思い出して頂きたいと思う。これは病の床に倒れ、伏したときにもあてはまるからである。「義は不滅である」⁸⁷⁾と言われたのはあなたの英知であることは、私もよく承知している。しかし、たとえあなたの独り子の義に覆われていようと、人間は不滅ではない。人はみな死ぬ。何故ならば、義そのものであられた方も死なれたからである。義の子であるあなたの独り子が、孤独とその寂しさを拒まれず、逆に、何度も何度も求められたことは、私も知っている。⁸⁸⁾しかし、彼は如何なる時でも、「十二軍団以上の天使」⁸⁹⁾を呼ぶことができた。そうでない時も、彼は決して孤独ではなかった。「わたしはひとりではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいる」⁹⁰⁾と言われたからである。私は常にあなたと、また、彼と共にあることは疑わない。けれども、私の病気が友人たちを去らせ、遠ざけ、「友も避けて立ち、わたしに近い者も、遠く離れ」⁹¹⁾ないとは言えない。私は御恵みによって、あなたを見ることができたこの瞬間から、あなたが私を無視されなことを疑わないが、私のそのような理解、そのような希望、そのような記憶が失われた結果、私の悲しい変化が見る人たちを失望させ、誤解を生じるようなことがないとは言えない。あなたの祝福された、力強い御子だけが、「ただひとり酒ぶねを踏み、諸国の民はだれひとり伴わなかった」⁹²⁾のである。私は独りでこの苦しみに耐えることはできない。あなたの助けなしに独りではできない。何故なら、あなたの霊はあなたである。また、あなたのものに助けられずに独りではできない。何故なら、精神的、肉体的医者はあなたのものである。また、私のものに助けられずに独りではできない。何故なら、血縁や友情が私のものでしたものは私のものである。従って、あなたと、あなたのもの、そして私のものが私を捨てれば、私は孤独である。もし私が孤独になれば、何と悲しいことか。エリヤは「ひとりだけ残る」⁹³⁾のを恐れて気を失った。マルタもひとりだけ残されたのを不満に思い、「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか」⁹⁴⁾とキリストに言った。エレミヤもその哀歌を始めるに当って、「なにゆえ、独りでですわっているのか、人に溢れていたこの都が」⁹⁵⁾と言うのが一番良いと考えた。あ

あ、私の神よ、あなたが孤独な生活を強いられるのは癲病患者である。⁹⁶⁾ 私の魂のなかに癲病を持っているから、独りで、あなたの助けもなしに独りで、私は死ななくてはならないのか。この病気は私の肉体のなかに癲病を育て、私は独りで、私を助け慰めるべき人達の助けもなしに独りで、死ななければならないのか。しかし、このような議論は神に向かって不満を言っていることにはならないか。私は「モーゼだけは主に近づくことができる」⁹⁷⁾と言われたことで、この議論の決着をつけねばならないのであろうか。他人に無視され、捨てられて、孤独になったほうが神に心が向くのではないか。我々が孤独な時に、神は我々を訪ねられるのではないか。しかし、同時に思い出して、しっかりと覚えておくべきことは、ヤコブがひとりになるまで、神は姿を現さなかったが、ひとりになると彼と相撲をとり、彼の足を痛めたことではないだろうか。⁹⁸⁾ 友達にも、医者にも、無視され捨てられた時にこそ、人は神とひとりで出会うことができる。そのとき神は、このヤコブ、この良心と格闘し、その関節をばらばらにはずされるのではないか。その時にこそ、人が顔を合わせるができないような姿で、神が現れるのではないか。神がその僕を通して与えて下さる肉体的、精神的慰めや、その他の配慮は、いわば鏡のようなものであり、それらがあれば、人は間接的に神を見たと思うのではないか。しかし、「誠実な友は、生命を保つ妙薬、主を畏れる者は、そのような友を見いだす」⁹⁹⁾と書かれている。それ故に、医者であり、私の誠実な友である一人の者を、神は私に与えて下さったのである。

祈 禱 V

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは罪に汚れた都を焼かれるために一度だけ天から火を降らせ、¹⁰⁰⁾ あなたに不満を言う者を呑み込むために一度だけ大地の口を開けられ、¹⁰¹⁾ 罪深い人達を滅ぼすため一度だけシロアムの塔を倒された。¹⁰²⁾ しかし、あなたの恵み深い行いは何度でも繰り返

し行われる。あなたが最初に此の世に人間を造られたとき、彼に相応しい助け人を与えられた例に従って、あなたはいつも行動されるのである。あなたは、いま、私を現状のまま長く保たれようとしているのか、それとも、死によって私を解雇されようとしているのか、私には分からないが、此の世に弱い病人として留まるにもせよ、此の世から永遠に移住するにもせよ、いずれの場合にも私に相応しい助け人を与えて下さい。そうして、もしあなたがそうすることによって栄光を受けられるのであれば、(あなたは如何なる方法を用いられても栄光を受けられる)、私を訪ねたい者が訪ねることができないような、また訪ねてくる者が危険を冒さねばならぬような疫病から私の肉体を守り、また、あなたは今日まで私を愛し来られたのであるから、最後まで、特に最後のときに、私を愛して下さいという確信を、私のためにも、他の人のためにも、少しでも揺るがすような錯乱から、私の精神を、その全ての働きにおいて、守って下さい。私が弱ったときに、あなたを信じる心を破壊するような、また、私の死後に、私を不意に襲って勝利を奪い取ったと嘘の自慢をして、私の名誉を傷つけるような、そのような敵を受け入れるために、心の戸であろうと、耳の戸であろうと、家の戸であろうと、私がそれを開けるようなことが決してないようにして下さい。どうか私の救いとなり、私の救いを懇願し、獲得し、宣言して下さい。最後の際まで、そして、最後の際においても、あなたが私の神であり、私があなたの僕であったということを、此の世の戦う教会も、あの世の勝利の教会も、共に確信できるようにして下さい。あなたが私の許に送られたこの医者¹⁰³⁾の学問と技術に祝福を与えて下さい。あなたが私の手を取って彼の手に委ねられるのですから(なぜなら、私はあなたの名において彼のところに行き、彼はあなたの名において私のところに来るのですから)、また、彼に寄せる私の希望も、あなたに捧げる私の祈りも、私は条件をつけて制限する積もりはなく、ひたすら「御国が来ますように、御心が行われますように」¹⁰³⁾という二つの願いの中に私の全ての願いを込めて祈るのでありますから、どうかあなたのやりかたで、あなたの定められる時に、あなたの選ぶ手段によって、彼を助け、私を救って下さい。アーメン。

〔注〕

主に原書の側注をもとに、聖書の出典を示す。側注でないものには（*）印を付す。

聖書は「新共同訳」を用い、詩編については側注と番号が異なる場合は括弧で示す。

- | | |
|-------------------|-----------------------------------|
| 1. イザ 38：9～20（*） | 32. 黙 2：22 |
| 2. ヨブ 1：22（*） | 33. マタ 8：6 |
| 3. 創世 28：16 | 34. マコ 2：3 |
| 4. ルカ 15：12（*） | 35. マタ 8：14 |
| 5. マタ 13：15 | 36. 詩 26：8 |
| 6. 王下 4：40 | 37. 詩 84：4（5） |
| 7. 箴 13：17 | 38. 詩 5：7（8） |
| 8. イザ 58：8 | 39. 詩 5：7（8） |
| 9. イザ 28：12（*） | 40. 詩 69：9（10） |
| 10. 創 3：19（*） | 41. 詩 84：1（2）（*） |
| 11. サム上 24：15 | 42. イザ 38：18（*） |
| 12. サム下 9：8 | 43. 1コリ 9：27 |
| 13. ロマ 4：17（*） | 44. ベル 36（*） |
| 14. 創 6：3（*） | 45. 王下 2：11 |
| 15. 民 14：33（*） | 46. マタ 26：39（*） |
| 16. エレ 23：19（*） | 47. ヨハ 12：32（*） |
| 17. 創 2：7（*） | 48. 出 21：18～19 |
| 18. サム下 24：14 | 49. 詩 41：3（4） |
| 19. 1コリ 15：52（*） | 50. 詩 4：4（5） |
| 20. 詩 34：8（9） | 51. ヨブ 13：3 |
| 21. 黙 19：9（*） | 52. エゼ 47：12 |
| 22. 箴 14：30 | 53. ヨハ 5：6～7 |
| 23. 詩 38：3（4） | 54. エレ 8：22 |
| 24. 詩 38：3（4） | 55. シラ 38：4 |
| 25. 出 3：2（*） | 56. シラ 10：10（*） |
| 26. マタ 27：29（*） | （ダンが用いた欽定訳と新共同訳とは逆の意味になっているようである） |
| 27. ディオゲネスへの言及（*） | |
| 28. マタ 19：14 | 57. シラ 38：15 |
| 29. エレ 1：6（*） | 58. 代下 16：12 |
| 30. アモ 6：4 | 59. シラ 38：9 |
| 31. 詩 132：3 | |

60. ヤコ 5:16 (*)
61. 詩 6:2 (3)
62. シラ 38:10
63. シラ 38:11 (*)
64. シラ 38:12
65. 使 9:34
66. ルカ 5:17
67. 黙 22:2
68. エレ 51:9
69. ホセ 5:13
70. イザ 53:5
71. 代下 7:14
72. エゼ 47:11 (8~11)
73. マタ 4:23
74. ルカ 6:19
75. ヨハ 7:23
76. 王下 20:5
77. 民 12:14
78. ヨハ 14:2 (*)
79. 創 2:18 (*)
80. 創 1:22
81. ヨハ 11:23

82. ヨハ 11:24
83. 民 23:9
84. 申 33:28
85. コヘ 4:9 (*)
86. コヘ 4:10
87. 知 1:15
88. マタ 14:23
89. マタ 26:53
90. ヨハ 8:16
91. 詩 38:11 (12)
92. イザ 63:3
93. 王上 19:14
94. ルカ 10:40
95. 哀 1:1
96. レビ 13:46
97. 出 24:2
98. 創 32:24
99. シラ 6:16
100. 創 19:24 (*)
101. 民 16:30 (*)
102. ルカ 13:4 (*)
103. マタ 6:10 (*)